

海城町・高松における 都市構造上の特異性に関する研究 ——海との関係に着目した近世城下町の構図比較——

西 成 典 久

1章 はじめに

「讃州さぬきの高松さまは城が見えます波の上」、この歌は船頭歌として詠まれた民謡の一節であり、海に面した高松城の特徴を示す歌として親しまれてきた。また、歌人である与謝野晶子は高松を訪れた際に「わだつみの玉藻の浦を前にしぬ 高松の城 竜宮のごと」（1931）と詠むなど、その美しさを唄に称えている。高松城は今治城、中津城に並ぶ日本三大水城の1つとして位置付けられており、水城として一定の評価はなされてきたといえよう。

しかし、江戸初期頃の高松が描かれた『高松城下図屏風』（図1参照）が示すように、近世高松は天守および城郭が海に面し、かつ城下町が天守を要に扇

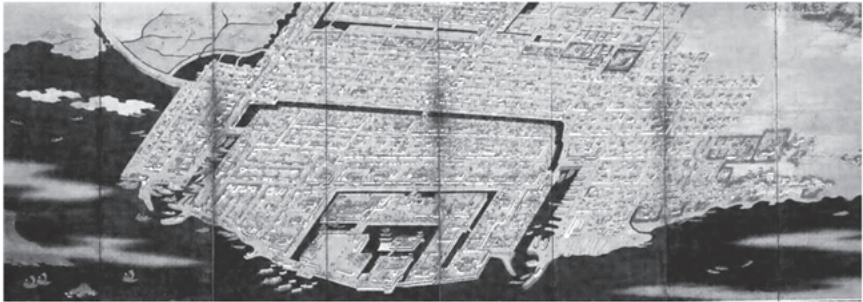


図1 高松城下図屏風（香川県立ミュージアム所蔵）

形に配置される極めて均整のとれた都市構造となっており、城郭の構造のみならず、こうした周辺地形との兼ね合いのなかで、近世城下町の構図的評価が学術的になされることはほとんどなかったといえる。城郭を対象とした研究には、歴史学、考古学、地理学、土木工学、建築学など、これまでに累々とした学術研究の蓄積があり、また、文化財としての価値継承や保全対策といった側面からは、国や自治体が主管となって管理運営を実践している。また、城下町のほうに目を向ければ、前述の研究分野のみならず、歴史的現象として人文社会一般の学術的研究対象となっており、伝統的町並みの保全や生活・文化の継承など、その研究的蓄積には事欠かない状況である。しかし、先にも記したように、城郭を含む城下町と周辺地形を俯瞰的に把握し、その構図の特徴を比較考察する研究的アプローチは管見のところ見当たらず、既存学問分野による緻密な研究実践が蓄積されていくなかで、町や周辺環境を総合的に把握し、俯瞰的視点で景観の価値（特徴）を照射するアプローチについては、これまで積極的にはとられてこなかったといえよう。

とはいえ、新しい視点のなかで膨大な研究成果をまとめている主要な研究は存在している。歴史地理学者の矢守¹⁾はその著「都市図の歴史」²⁾のなかで、現代に残る都市図の発達過程を示し、古代から近世近代までの都市プランがどのように変容していったのか、特に城下町については個別都市の都市図をもとにその変遷を詳細に把握している。その他城下町に関する数多くの著作以外にも、城下町絵図集や関連史料を編纂するなど、この分野の第一人者といえる。

また、建築学分野では、佐藤による城下町の一連の研究が挙げられ、その成果がまとめられた著作「城下町の近代都市づくり」³⁾では、近世城下町の計画・建設された構成原理に着目し、街路網の計画意図や城郭の配置など、全国の主要な城下町を対象として類型化を行っている。そのうえで、こうした近世城下

1) 矢守一彦 (1927-1992) は人文地理学者で大阪大学名誉教授。「都市プランの歴史地理」で京都大学から文学博士を取得。人文地理の視点から近世城下町に関する多くの研究・著作を残している。

2) 矢守一彦 (1974) 「都市図の歴史-日本編」講談社

3) 佐藤滋 (1995) 「城下町の近代都市づくり」鹿島出版会

町の都市構造が近代以降どのように発展または解体されていったのかを明らかにしている。都市周辺の地形条件との関係性も含めている点で、本研究と最も近い研究視座であり、都市デザインの視点からみた城下町研究の金字塔ともいえる。その他、ヴィスタと城下町設計との関連性を考察した宮本⁴⁾や江戸時代の大工道具から城下町設計の手法を考察した高見⁵⁾など、日本における近世城下町がどのようにして計画・普請されたのか、その設計原理については多くの研究者が関心をもつ共通の歴史的関心事といえる。

本研究は、こうした先人たちの研究蓄積のなかでようやく成り立つものであり、特に城郭および城下町、またそれらの配置を構造的に支える周辺地形も含め、これらを構図的に比較検討する点においては、これまでにない本研究の新しい視点といえる⁶⁾とはいえ、本研究のみで全国津々浦々の近世城下町の構図的特徴を把握することは力及ばず、本研究ではまず近世高松の構図的特徴を把握することを基軸として、特に海との関係に着目した全国の近世城下町を対象とした構図比較を行うことで、海城⁷⁾を有する城下町の構図的特徴を明らかにすることを研究目的としたい。より具体的に記すならば、本研究では現代に残る主要な近世城絵図を蒐集したうえで、近世城下町から海と城郭が直接面する海城を特定し、海との関係に着目した海城および城下町の構図的特徴を把握していく。そのうえで、高松と近い構図的特徴を有する近世城下町とのより詳細な比較を通じて、近世高松における都市構造上の特異性を明らかとし、今後の活用策について考察していく。

続いて、研究の方法と構成を示していく。まず、第2章では研究対象の選定と使用する用語の概念検討を進めていく。特に、近世城下町における海城を特定するうえで、根拠とする史料の把握や比較する年代に対する検討が必要であり、

4) 宮本雅明（2005）「都市空間の近世史研究」中央公論美術出版

5) 高見敏志（2008）「近世城下町の設計技法－視軸と神秘的な三角形の秘密－」技法堂出版

6) 先学においては近世城下町の設計原理に着目した研究が多く、周辺地形との兼ね合いのなかで城郭および城下町を構図的に比較検討し、それぞれの配置的特徴を見出すアプローチはこれまでとられてこなかったといえる。

7) 本研究で使用する「海城」の概念検討は2章で詳しく述べる。

対象選定の基準を明確にしていく⁸⁾第3章では、本研究で対象とする近世城下町の城絵図史料をもとに、その配置構造を比較分析し、それぞれの構図の特徴のアウトラインを明らかにしていく。第4章では、近世高松の城下町構造に着目し、主要な海城町⁹⁾とのより詳細な比較を通じて、海城町としての高松の特異性を明らかにしていく。第5章では本研究の結論としてまとめを行い、海城町としての特異性やその構図的特徴を生かすまちづくりについて考察する。

2章 研究対象の選定と用語の検討

本研究では、まず全国の近世城下町を対象として、海に面する海城を特定していく必要がある。そのためには、本研究で使用する用語「海城」の概念定義とともに、対象とする近世城下町の内容や時代区分の整理が必要となる。そこで、本章では、まず対象とすべき近世城下町に対して、対象を選定するための方法や概念定義、使用する史料の検討・整理を行い、「海城」を特定するための準備を行う。そのうえで、本研究で対象とすべき「海城」を選定し、その概要を述べていくこととする。

2-1. 対象選定の方法と用語の概念整理

本研究で捉えようとする近世城下町の内容と対象時期であるが、ここは先学の城郭研究に関する知見をもとにその考え方を整理していく。まず、本研究で捉える近世城下町の時代的範囲については、織田信長の安土城を画期とする織豊系城郭¹⁰⁾以後とする。江戸時代に入り、徳川家康は諸大名の軍事力を抑制することを目的として1615年に一国一城令を発令し、諸大名の領内にある居城以外のすべての城の破却を命じた。その後に発令された武家諸法度も含め、諸大名は新規の築城はもとより、増改築についても幕府の許可制となった。こ

8) 既往知見では一般的に「海城」という用語や認識はあるものの、明確な定義や線引きがなされているわけではなく、本研究においてどこまでを「海城」として扱うか、その検討が必要となった。

9) 本研究で使用する用語「海城町」の定義については3章で示すこととする。

れにより、中世のころに築城された数多くの城郭は破却され、諸大名の家臣団や領民は諸国で中心となる城下町への集住が進み、結果的に約170程度の近世城下町が全国に形成され、そのまま明治を迎えることとなった。

本研究では、近世期を通じて形成された城下町を対象とすることから、一国一城令を経て残された各国諸大名の城郭（陣屋を除く）を対象とし、その後、江戸時代を通じて新規に築城が許された地区も含めて分析の対象とする。なお、佐藤は近世城下町を「封建都市の軍事拠点としての『城郭』と、都市を中心とした商工活動が活発化する近世社会の中心地としての『城下』が合体した市街地全体¹¹⁾と定義しており、時代区分としては織豊系城郭を対象としている。本研究では、この佐藤の定義を援用しつつ、近世城下町を「城郭」と「城下」を合わせた市街地全体として捉えていく。

続いて、本研究で対象とする「海城」の定義であるが、先に記したように既往知見においても明確な区別が統一されているわけではない。一般的に、立地による城郭構造の分類として、「山城」「平山城」「平城」とした3つの分け方がなされている。「山城」は山頂や山の中腹に築かれた城を指し、南北朝から戦国時代にかけて発展した。その後、城郭構造は「平山城」「平城」に移行していくことから、「山城」については「中世山城」と呼ばれることもある。「平山城」は平地にある丘や小山に築かれた城であり、一般的には比高差100m前後以内の丘を利用して築かれた城郭の形式である。「平城」は平地に築かれた城を指し、「平山城」とともに織豊系城郭以降に主流となる城郭形式で、天守は権力の象徴として高層化する傾向にあった。

10) 織豊系城郭とは、織田信長の「織」、豊臣秀吉の「豊」を合わせて「織豊」と呼び、信長による安土城や岐阜城がその始まりとされる。それまで、中世城郭は基本的に山城として山の地形を利用した城づくりを行ってきたが、鉄砲の普及や社会情勢の変化とともに軍事のためだけではなく象徴（権力）としての城づくりが進められていくこととなった。建築構造としては、瓦、石垣、天守などが織豊系城郭から顕著にみられ、楽市楽座の普及とともに城下には町が形成されている。秀吉による天下統一後、各地の大名は大坂城などを手本に新しい時代の城づくりに着手し、織豊系城郭は全国に伝播することとなる。

参考：齋藤慎一、向井一雄（2016）「日本城郭史」吉川弘文館

11) 佐藤滋（1995）「城下町の近代都市づくり」鹿島出版会、P.9-10

このように、城郭の立地特徴から一般的な分類がなされているものの、「海城」に関する共通した定義はいまだ共有されていないといえる。そのため、本研究で対象とする「海城」を定義していく必要があるが、まず、「水城」については城郭部分が直接水に面している城郭を指すこととし、それぞれが面する水域の違いから「海城」「河城」「湖城」というように本研究では用語を定義する。その際、「海城」を捉えるうえで問題となるのは、海との境界となる汽水水域であるが、本研究では河口付近の水城は「海城」として扱い、その境目に立地するような事例については個別に検討することとする。また、「海城」のなかでも、村上水軍の本拠地となった能島城や来島城といった海賊城があるが、その多くは織豊系城郭以前、すなわち中世の城郭となり、近世城下町を対象とする本研究では対象外とした。

また、「海に面する」という点についてもより詳細な定義が必要であり、本研究では城郭および城山が直接「海に面する」ことを条件とし、海と城郭のあいだに城下町や陸地が立地しているものは本研究の対象から外すこととした。より詳しい「海城」の定義については、「海城」を特定させていく際に境界域となる城郭を個別に分析していくことで、本研究で捉えようとする「海城」の定義を明確化していく。

2-2. 研究対象の選定

前節にて、本研究で対象とする近世城下町概念および扱う時代区分について整理し、本研究で使用する「海城」の定義についても検討を行った。本節では、現在残されている城絵図等を広く蒐集し、主となる史料群¹²⁾をもとに対

12) 本文にて後述するが、主となる史料群としては以下の史料が挙げられる。
原田伴彦、矢守一彦編（1982）「浅野文庫蔵諸国当城之図」新人物往来社
矢守一彦編集（1981）「浅野文庫蔵諸国古城之図」新人物往来社
前田育徳会尊経閣文庫編（2000）「諸国居城図－尊経閣文庫蔵」新人物往来社
児玉幸多監修（1980-1985）「日本城下町繪圖集－東北篇、関東・甲信越篇、東海・北陸篇、近畿篇、中国・四国篇、九州篇」昭和礼文社
「正保城絵図」国立国会図書館デジタルライブラリー
「日本古城絵図」国立国会図書館デジタルコレクション

象とすべき全国の近世城下町を可能な限りリストアップし、当時の城郭図等から城郭部分が海に面する「海城」を特定していった。また、個別の城郭によっては、当時の城郭図等では周辺地形が判断できない図版もあるため、現在の城址周辺の地形条件¹³⁾から当時の立地状況を比定したうえで、「海城」を特定していった。その結果、全部で24地区の「海城」有する近世城下町を特定することができた。結果を次の図表にまとめる(表1, 図2参照)。

表1は特定した「海城」のリストであるが、それぞれ国名、藩名、城名を記載するとともに、城毎に築城年、城郭構造(立地分類)、臨海域、築城者(築城城主)を把握・整理した。築城年について、城地によってはもともと中世城郭が築かれていた場所に近世城郭を改修・整備した地区もあり¹⁴⁾本研究では織豊時代の近世城郭を対象として扱うことから、本リストで把握している築城年はあくまでも織豊時代に近世城郭として新たに整備し始めた西暦年を記載することとした。これら特定された「海城」の位置を日本地図にプロットしたのが図2となる。

まず特筆すべきは、北(陸奥国)から南(薩摩国)まで日本全国の近世城下町を対象として「海城」を特定したところ、伊勢より西の西日本側に全ての「海城」が特定される結果となった。東日本側で確認できる水城としては、例えば忍城や古河城、土浦城のように、湖沼を大胆に利用した近世城郭は関東平野に多く存在するものの、「海城」については確認できなかった¹⁵⁾また、特定した「海城」が面する臨海域は全て地形によって外海から守られる湾内もしくは内海であり、特に瀬戸内海に面する「海城」は全24城のうち13城と半数以上を占める結果となった。

13) 現在の地形条件については文献(小林智広, 石川夏子編(2010)「お城の地図帳」辰巳出版)やGoogle Map等を用いて城址の位置を特定し、江戸時代の城郭図も加味して当時の地形状況を推定した。

14) 例えば、鳥羽、米子、三原、萩、洲本、宇和島、白杵などがその事例にあてはまる。

15) 沼地ではなく、湖を利用した近世城郭として代表的なものは高島城、彦根城、膳所城などが挙げられる。また、水城のなかでも河川に直接面する城郭は東日本、西日本問わず全国各地で確認できる。

表1 近世城下町における「海城」リスト

No.	国	藩	城名	築城年	構造	臨海地域	築城者
1	伊勢国	桑名藩	桑名城	1601	平城	太平洋（伊勢湾）	本多忠勝
2	志摩国	鳥羽藩	鳥羽城	1594	平山城	太平洋（伊勢湾）	九鬼嘉隆
3	若狭国	小浜藩	小浜城	1601	平城	日本海（若狭湾）	京極高次
4	丹後国	田辺藩	田辺城	1579	平城	日本海（若狭湾）	田辺氏
5	丹後国	宮津藩	宮津城	1579	平城	日本海（若狭湾）	細川忠興
6	摂津国	尼崎藩	尼崎城	1617	平城	瀬戸内海（大阪湾）	戸田氏鉄
7	播磨国	赤穂藩	赤穂城	1648	平城	瀬戸内海（播磨灘）	浅野長直
8	伯耆国	米子藩	米子城	1601	平山城	日本海（中海）	山名氏
9	石見国	浜田藩	浜田城	1619	平山城	日本海（松原湾）	古田重治
10	安芸国	広島藩	三原城	1580	平城	瀬戸内海（三原湾）	小早川隆景
11	長門国	萩藩	萩城	1608	平山城	日本海（萩湾）	毛利輝元
12	淡路国	徳島藩	洲本城	1585	平山城	瀬戸内海（大阪湾）	脇坂安治
13	讃岐国	高松藩	高松城	1588	平城	瀬戸内海（備讃瀬戸）	生駒親正
14	伊予国	今治藩	今治城	1602	平城	瀬戸内海（燧灘）	藤堂高虎
15	伊予国	宇和島藩	宇和島城	1601	平山城	瀬戸内海（宇和海）	藤堂高虎
16	豊前国	小倉藩	小倉城	1602	平城	瀬戸内海（関門海峡）	細川忠興
17	豊前国	中津藩	中津城	1588	平城	瀬戸内海（周防灘）	黒田如水
18	豊後国	杵築藩	杵築城	1591	平山城	瀬戸内海（別府湾）	木村頼直
19	豊後国	日出藩	日出城	1602	平山城	瀬戸内海（別府湾）	木下延俊
20	豊後国	府内藩	府内城	1597	平城	瀬戸内海（別府湾）	福原直高
21	豊後国	臼杵藩	臼杵城	1597	平山城	瀬戸内海（臼杵湾）	太田一吉
22	肥前国	唐津藩	唐津城	1602	平山城	日本海（唐津湾）	寺沢広高
23	肥前国	平戸藩	平戸城	1707	平山城	日本海（平戸瀬戸）	松浦鎮信
24	肥前国	大村藩	大村城	1599	平山城	日本海（大村湾）	大村喜前



図2 近世城下町における「海城」位置図

続いて、これら24の「海城」を特定していくうえで、境界域となる近世城下町がいくつか存在した。以下、具体事例を示しつつ、本研究で選定した「海城」の定義を明確にしていきたい。

まず、2-1.にて先述した通り、本研究でいう「海城」は城郭部分が直接「海」に面している城を「海城」とし、海と城郭の間に城下町などが立地している場合には「海城」としてピックアップしなかった¹⁶⁾ 例えば、代表的なところでいえば、小田原城、明石城、広島城、丸亀城、福岡城、鹿児島城などがそれにあたり（図3参照）、厳密に言えば江戸城や大阪城も海と城郭の間に城下町が立地しているケースとなる。また、「城郭部分が海に面している」という点に

16) 本研究で「海城」としてピックアップした尼崎城についていえば、海と城郭の間に一部陸地がある境界領域の近世城下町となるが、直接海と接している城郭部分が多くを占めることから、本研究では「海城」に含めた。

についてもより厳密な定義が必要となった。例えば、唐津城や臼杵城のように、既存の山や丘を利用して近世城郭が建設された場合、直接海に面しているのは山や丘の自然地形が主となるが、どこまでを人工物と捉えるかは厳密には区別できないため、こうしたいわゆる平山城で自然地形が海に面している城郭も本研究では「海城」に含めることとした。また、近い事例となるが、宇和島城や洲本城のように、中世山城を利用して近世城郭が建設された城下町についても、自然地形が海に面しており、かつ、織豊期に入ってから新たな時代精神のなかで近世城下町が建設されたことから、こうした事例も本研究で捉える「海城」とした。

続いて、城郭の建設年代についても詳しい説明が必要となる。先述したように、徳川幕府は1615年に一国一城令を発令し、全国諸大名の城郭建設を厳しく統制することとなった。結果的に、近世城下町は各地域で分散することなく、幕府と諸大名による管理のもと、江戸時代を通じて各城下町は経済的・文化的に発展することとなる。しかし一方で、一国一城令によって近世城下町が確定したわけではなく、その後の二百数十年の歴史のなかで、新たに城郭建設が認められた地区や、政治的な動きのなかで城郭を破却し陣屋扱いとなるようなケースも散見された。特に「海城」に関していえば、境界領域となるケースに肥前国の五島列島にある福江城が挙げられる。福江城は石田城とも呼ばれ、明治開国直前の1863年に建設された日本で最も新しい城と言われている。福江城が建設された背景には、幕末期の異

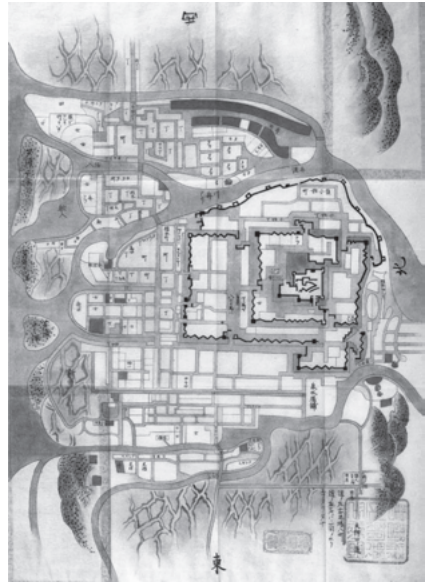


図3 安芸国広島城

広島城下町は太田川三角州に建設され、城郭は海と直接面さず、海と城郭の間に町人地等の城下町が形成されている。

国船来訪があり，異国船の監視と海上防衛の観点から築城が認められた城郭となる。しかし，その後1868年に明治維新を迎え，幕藩体制には終止符が打たれ，福江城は築城後わずか9年で廃城することとなった。本研究では近世城下町を対象としていることから，福江城自体は「海城」であるものの，近世を通じて発展した城下町とはいえ，幕末期は織豊期の城郭建設と比べてその時代背景も大きく異なることから，今回は本研究の対象から外すこととした。

その他，例外的な事例として，遠江国の横須賀城が挙げられる（図4参照）。横須賀城は徳川家康が大須賀康高に命じて築いた城郭であり，1578年に築城された。築城当時は城郭に面して入江が深く入り込んで

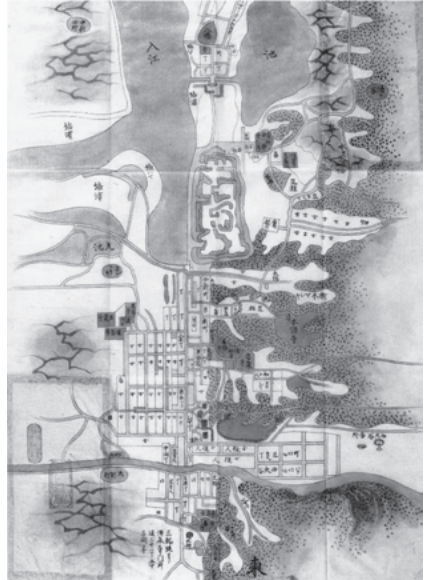


図4 遠江国横須賀城

1578年遠州灘につながる入江の辺に築城されるものの，1707年の宝永大地震によって地盤が隆起し，入江は陸地化した。

おり，入江内には横須賀湊が形成され，横須賀城は海上交通の要衝となっていた。しかし，1707年の宝永大地震による地盤隆起によって入江は陸地化し，直接海に面していた横須賀城はその様相を一変することとなる。本研究では，海に面する「海城」および城郭周辺に形成される城下町を対象とするため，当初は「海城」であったとしても，1707年という江戸初期の段階で地形的変化を余儀なくされた横須賀城については，今回研究の対象としてリストアップしないこととした。

以上，全国の近世城下町の立地や歴史的経緯を把握したうえで，境界域となった近世城下町の「海城」としての扱い（考え方）を整理した。以上のような段階を踏んで，本研究では24の「海城」城下町を特定した。

3章 近世城下町における海城町の構図比較

前章において、全国の近世城下町を対象として地理的・歴史的観点から「海城」を特定した。本章では、これら24地区の「海城」と城下町および周辺地形との構図的比較を行い、配置上の特徴を明らかにしていく。

3-1. 比較方法

本研究の目的は「海城」を有する城下町の構図の特徴を明らかにすることであり、本章では特に海との関係に着目した構図比較を行っていく。実際に分析を始める前に、いま一度用語の概念的整理を行う必要がある。まず、「海城」の定義については前章を通じて行ってきたが、ここでは主に「城郭」としての「海城」を扱ってきた。「城郭」とは、本研究では織豊期を対象としているため、基本的な構造を「天守」と「縄張」（曲輪）で構成される区域を想定している。一方で、本研究で使用する「城下町」は、基本的に「城郭」の周囲に形成される武家地や町人地、寺社地等を想定している¹⁷⁾つまり、厳密に言えば、本研究で「城下町」は「城郭」を含めない建物集積地を指すこととなり、「城郭」と「城下町」を合わせた総体としての建物集積地を示す用語がない状況となる。そこで本研究では、特に「海城」を対象とするため、「城郭」である「海城」とその「城下町」を合わせた、総体としての建物集積地を「海城町」と呼ぶこととする。

続いて、より詳細な比較方法の検討に入る。まず、「海城町」の構図比較を行うための主要な城絵図としては、前章の分析でも使用した「浅野文庫蔵諸国当城之図」（以下、「当城之図」）を用いる。「当城之図」は広島市立中央図書館浅野文庫が所蔵している「諸国当城古城之図」のうちの「諸国当城之図」であり、「諸国古城之図」とは両輪の関係にある。「当城之図」の編修時期について

17) ここで示している「城下町」はあくまでも一般化した定義であり、実際には様々な形態が存在している。例えば、「城郭」は堀を周囲に巡らすことで「城下町」との空間的な区切りを行うが、小倉城のように「城下町」の周囲にも外堀を巡らせて外界との区別を行う「総郭」と呼ばれる事例もある。

は明らかになっていないものの、「当城之図」復刻版の解説文にて、矢守によれば1681年から1688年の間で作成・蒐集されたと考えられており¹⁸⁾江戸時代初期から中期にかけての「城郭」および「城下町」の様子が描かれたとされている。ここで、「当城」とはこの推定編修時期において幕府から認められた「当代の城」であることを示し、「古城」とは一国一城令によって廃城となった城を示している。「当城之図」では162地区の城郭および城下町が描かれており、白石城や米子城、三原城のように一国一城令以後においても城の存続が許されたものも含まれていることから、本研究で検討する「海城町」の構図比較をするうえでの基礎的史料として使用することとする¹⁹⁾

また、近世城下町の構図比較を行ううえで、どの時点での城下町を抽出して構図比較を行うかについても検討が必要となる。「当城之図」で描かれた城郭および城下町の図は、先述したように江戸時代初期から中期にかけての城絵図が描かれている。本研究で対象とする「海城町」は、河口付近で築城された城郭も多く、100年200年という年月のなかで土砂堆積が進み、江戸時代後期には海と城郭の間に陸域が形成されているケースもありうる。地区によっては、城下町に居住する人口が増加し、城下町の海岸地先を埋め立て、港湾区域の拡大や市街地の拡大を行う地区もでてくる。このように常に成長・変化する城下町であるが、本研究では史的な限界を鑑み、「当城之図」が描かれた江戸時代初期から中期にかけての時代を主軸として構図比較を行い²⁰⁾その後、江戸末期に至る間に大きく海岸線が変更した地区については、個別に事例検討する

18) 原田伴彦、矢守一彦編（1982）「浅野文庫蔵諸国当城之図」新人物往来社、P. 224-226 参照

19) 「当城之図」で作成・蒐集された個別の城図について、一部の城図においてはその他の諸史料との比較において間違いが指摘されており、その真偽については個別の城図において可能な限り検討し、配置上の重大な欠陥がある場合には史的制約を鑑みつつ別途城図の収集を行う。

20) その他参照した城絵図として「正保城絵図」（補注12参照）が挙げられる。「当城之図」とほぼ同時代（17世紀中頃）に作成されたと考えられるが、「正保城絵図」は「当城之図」に比べて城下町の集積エリアが広く描かれているケースが多く見られる。本研究では、構図比較という観点からできる限り同じ思想で作成・蒐集された「当城之図」を基準として用いるが、「正保城絵図」についても補足的に参照することとする。

こととする（4章参照）。

3-2. 構図比較

以下、「海城町」の構図比較を行うための具体的な比較項目を検討していく。まず、前述の通り、「海城町」24地区の城絵図は基本的に「当城之図」を用いることとする。本研究で抽出した24地区の城絵図は全て「当城之図」に所収されており、それぞれ描かれた城絵図の真偽性についても検討を重ねた。その結果、肥前国の大村城については「当城之図」に所収されている城絵図に明らかな誤りがあることが復刻版解説文でも指摘されており、そのため、大村城については江戸時代中期から後期にかけて作成されたとされる「日本古城絵図」²¹⁾に所収された城絵図を用いることとする。それ以外の23地区については、「当城之図」に所収された城絵図を用いる。

これら蒐集した城絵図を横並びで比較するために、表形式でまとめ、次表にてその結果を示す（表2参照）。表には地区毎に城名、国名、構造、築城年、臨海域、石高を記載した。なお、石高については城主が移封するたびに石高の増減があることから、江戸時代末時点での表高を記載している。また、掲載している城絵図の方位については地区毎に異なっている。

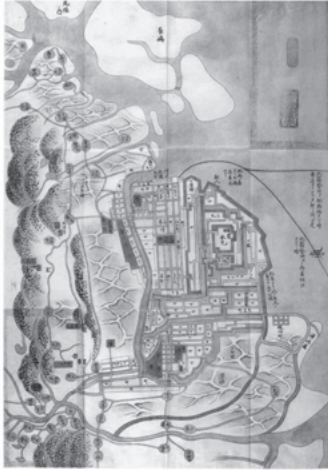
3-3. 比較結果の考察

城郭としての「海城」とその周囲に形成される「城下町」、および周辺地形（主に海との関係性）の構図を比較・分析した結果、その構図の特徴から「出島型」「同心円型」「並置型」という3つの類型に分けることができた。それぞれ該当する海城町とともに、その配置特徴を分析し、その結果を表3にまとめた。

まず、24地区の城絵図を比較した結果、海岸線に対して「城郭」部分が出島のように陸地と乖離もしくは突出している構図とそうでない構図に分けることができた。本研究では、前者を「出島型」と名付け、該当する海城町をピッ

21) 「日本古城絵図」国立国会図書館デジタルコレクション

表2 近世城下町における海城町の構図比較



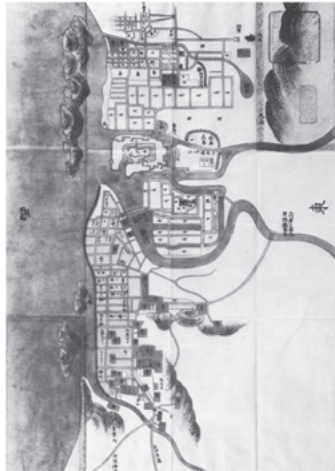
1 桑名城

国名：伊勢国 構造：平城 築城：1601年
臨海域：太平洋（伊勢湾） 石高：10万石



2 烏羽城

国名：志摩国 構造：平山城 築城：1594年
臨海域：太平洋（伊勢湾） 石高：3万5千石



3 小浜城

国名：若狭国 構造：平城 築城：1601年
臨海域：日本海（若狭湾） 石高：11万2千石



4 田辺城

国名：丹後国 構造：平城 築城：1579年
臨海域：日本海（若狭湾） 石高：3万5千石

表2 近世城下町における海城町の構図比較 (つづき)



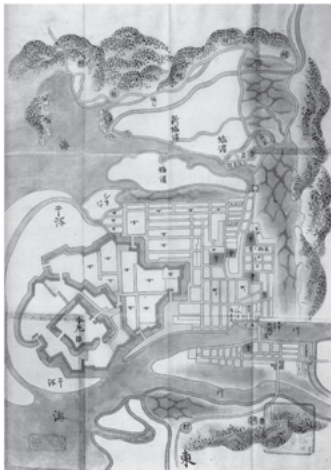
5 宮津城

国名：丹後国 構造：平城 築城：1579年
臨海域：日本海(若狭湾) 石高：7万石



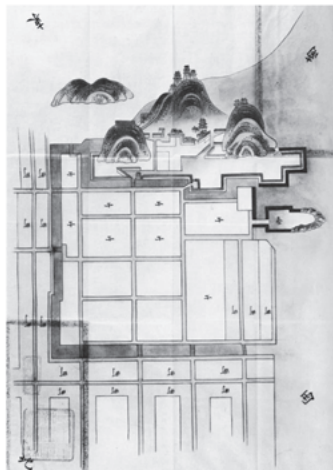
6 尼崎城

国名：摂津国 構造：平城 築城：1617年
臨海域：瀬戸内海(大阪湾) 石高：4万石



7 赤穂城

国名：播磨国 構造：平城 築城：1648年
臨海域：瀬戸内海(播磨灘) 石高：2万石



8 米子城

国名：伯耆国 構造：平山城 築城：1601年
臨海域：日本海(中海) 石高：6万石

表2 近世城下町における海城町の構図比較 (つづき)



9 浜田城
 国名：石見国 構造：平山城 築城：1619年
 臨海域：日本海(松原湾) 石高：5万5千石



10 三原城
 国名：安芸国 構造：平城 築城：1580年
 臨海域：瀬戸内海(三原湾) 石高：3万石

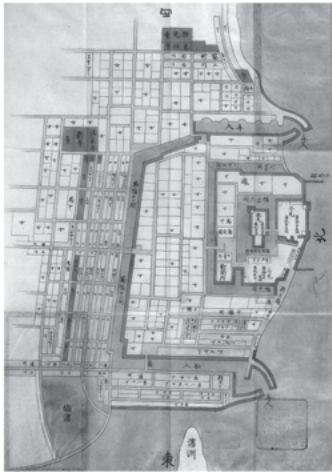


11 萩城
 国名：長門国 構造：平山城 築城：1608年
 臨海域：日本海(萩湾) 石高：36万9千石

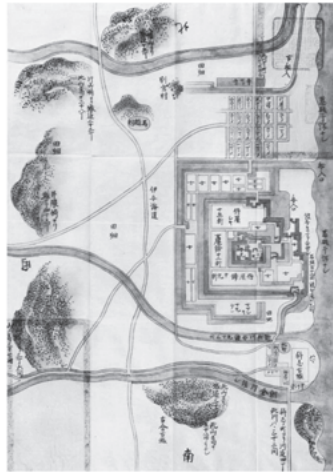


12 洲本城
 国名：淡路国 構造：平山城 築城：1585年
 臨海域：瀬戸内海(大阪湾) 石高：6万石

表2 近世城下町における海城町の構図比較 (つづき)



13 高松城
 国名：讃岐国 構造：平城 築城：1588年
 臨海城：瀬戸内海（備讃瀬戸） 石高：12万石



14 今治城
 国名：伊予国 構造：平城 築城：1602年
 臨海城：瀬戸内海（幾瀬） 石高：3万石



15 宇和島城
 国名：伊予国 構造：平山城 築城：1601年
 臨海城：瀬戸内海（宇和海） 石高：10万石



16 小倉城
 国名：豊前国 構造：平城 築城：1602年
 臨海城：瀬戸内海（関門海峡） 石高：15万石

表2 近世城下町における海城町の構図比較 (つづき)



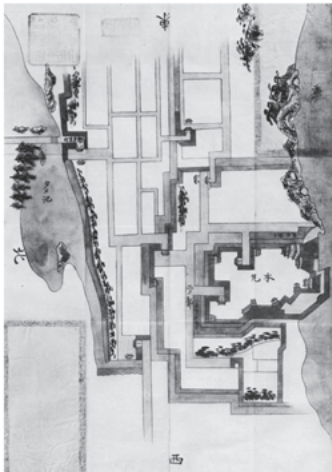
17 中津城

国名：豊前国 構造：平城 築城：1588年
 臨海域：瀬戸内海（周防灘） 石高：10万石



18 杵築城

国名：豊後国 構造：平山城 築城：1591年
 臨海域：瀬戸内海（別府湾） 石高：3万2千石



19 日出城

国名：豊後国 構造：平山城 築城：1602年
 臨海域：瀬戸内海（別府湾） 石高：3万石



20 府内城

国名：豊後国 構造：平城 築城：1597年
 臨海域：瀬戸内海（別府湾） 石高：2万2千石

表2 近世城下町における海城町の構図比較 (つづき)



21 白杵城

国名：豊後国 構造：平山城 築城：1597年
臨海域：瀬戸内海（白杵湾） 石高：5万石



22 唐津城

国名：肥前国 構造：平山城 築城：1602年
臨海域：日本海（唐津湾） 石高：6万石



23 平戸城

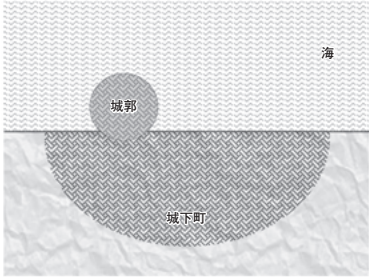
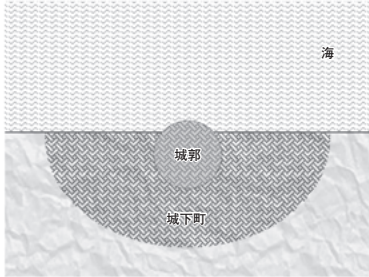
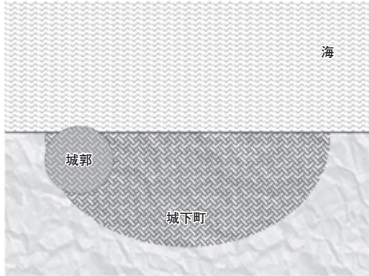
国名：肥前国 構造：平山城 築城：1707年
臨海域：日本海（平戸瀬戸） 石高：6万3千石



24 大村城

国名：肥前国 構造：平山城 築城：1599年
臨海域：日本海（大村湾） 石高：2万8千石

表3 海との関係に着目した「海城町」における構図上の類型化

出島型	
<p>該当する海城町：9 地区 鳥羽、赤穂、浜田、萩、杵築、白杵、唐津、平戸、大村</p> <p>配置特徴： 海岸線から海側に飛び出るように城郭が築城され、陸地側に城下町が形成されるような配置構図。 城郭部分は岬や丘など、海側に飛び出た地形を生かして築城されたケースが多い。9 地区のうち、赤穂以外、8 地区の城郭が平山城の形式をとっており、海岸近くにある小島や丘を利用して築城されたと考えられる。</p>	 <p>出島型</p>
同心円型	
<p>該当する海城町：9 地区 桑名、宮津、三原、高松、宇和島、小倉、中津、日出、府内</p> <p>配置特徴： 城郭は海岸線から飛び出ない地形の陸地側で築城され、城郭を中心として城下町が環状に座するような配置構図。 三角州によって形成された比較的広い平野のある地形が生かされるケースが多い。9 地区のうち、宇和島と日出は平山城であり、その他 7 地区が平城の形式をとっており、多くは海から直接城郭に入る構造となっている。</p>	 <p>同心円型</p>
並置型	
<p>該当する海城町：6 地区 小浜、田辺、尼崎、米子、須本、今治</p> <p>配置特徴： 城郭は海岸線から飛び出ない地形の陸地側で築城され、城郭と城下町が並置されるような配置構図。 城郭の配置が城下町に対してどちらかに偏り、城郭背後には山や川などの自然防護となるケースが多い。6 地区のうち、米子と洲本が平山城であり、その他 4 地区は平城の形式をとっている。城下町背後に山が迫っている地形が多い。</p>	 <p>並置型</p>

クアッパした結果、24地区のうち9地区（鳥羽、赤穂、浜田、萩、杵築、白杵、唐津、平戸、大村）が該当する結果となった。特色としては、海岸沿いにある小島や丘を利用して築城されたケースが多く、結果的に城郭の構造（立地特徴）としては「平山城」をとることが多くなり、赤穂城を除いて他8地区は「平山城」となっている。

続いて、「城郭」部分が陸地と乖離せず、「城郭」と「城下町」が陸地側で一体的に構成されている残りの15地区であるが、これらの構図の特徴を大きく捉えた結果、「城郭」と「城下町」の付置関係に2つの類型があることを見出すことができた。まず1つ目が「城郭」を中心として「城下町」が周縁に配置されるケースである。本研究ではこうした構図の特徴を「同心円型」と呼び、該当する海城町を抽出した結果、15地区のうち9地区（桑名、宮津、三原、高松、宇和島、小倉、中津、日出、府内）が該当する結果となった。特色としては、城郭構造として「平城」をとるケースが多く、宇和島城と日出城を除いて7地区が「平城」であり、地形条件としては大小河川が形成した堆積平野を築城場所として選地したといえる。また、9地区のうち桑名城と宮津城を除く7地区が瀬戸内海沿いに築城されており、静穏な海象条件が「同心円型」の構図を可能にしていると考察できる。続いて、もう1つの類型としては、「城郭」と「城下町」が並置されるような関係性で配置される構図であり、本研究ではこうした構図を「並置型」と呼ぶこととする。「同心円型」は「城郭」を中心としてその周縁に「城下町」が形成される構図となるが、「並置型」の場合は「城郭」と「城下町」が線状に近い付置関係となり、「城郭」は中心からどちらかに片寄るケースが多い。城郭防御の観点と地形的制約から「並置型」の構図をとると考えられ、河川や山を背後として「城郭」の築城場所を選地したと考えられる。6地区のうち米子城と洲本城を除く4地区が「平城」であり、それぞれ所与の地形条件を生かして城郭および城下町の建設がなされたといえる。

以上、本章では近世城下町における海城町24地区を対象として城絵図をもとに構図比較を行い、結果的にその構図の特徴から3つの類型に分類することができた。

4章 近世高松における都市構造上の特異性

前章において、城絵図をもとに近世城下町における海城町の構図を比較し、海との関係に着目して城郭および城下町の構図的特徴を分類した結果、大きく3つのタイプに類型化することができた。本章では、特に日本三大水城としても名高い海城町・高松に着目し、その他高松と近い構図的特徴を持つ海城町との比較を通じて、近世高松における都市構造上の特異性を浮き彫りとしていく。また、現代の都市空間との比較を通じて、城郭周辺の通時的な空間変容についても把握していく。

4-1. 高松と近い構図的特徴をもつ海城町の比較


1章でも述べた通り、本研究は海城町として発展してきた近世高松の構図的特徴を明らかにすることが目的の1つである。本節では、海城町・高松の構図的特徴をより詳細に把握するうえで、前章までに把握した全国の海城町のなかから、高松と近い構図的特徴をもつ海城町を採り上げ、より詳細な比較を行っていく。

まずは、比較対象となる海城町を選定していくが、比較対象としては、高松と同様の構図的特徴をもつ「同心円型」で、かつ城郭構造としては「平城」を採り上げる（本研究では「同心円型平城」と呼ぶ）。ちなみに、「同心円型」で「平山城」の城郭構造をとるのは宇和島城と日出城であるが、それぞれ小島や岬などの地形を生かして築城されており、臨海部は石垣等の人工物ではなく自然地形となっている。また、天守自体も小島や岬の頂部に立地していることから、「平城」の構造をとる城郭とは景観上あるいは構図上の観点から異なる特徴を有しているといえる。その結果、本研究では海城町のなかでも「同心円型平城」を選出し、以下の7地区（高松、桑名、宮津、三原、中津、小倉、府内）を比較対象として選定する。

続いて、これら7地区の海城町を表形式で整理していくが、同じ視点で比較するための比較項目を記していく。まず、7地区それぞれの構図を示す城絵図が必要となるが、浅野家の「当城之図」（江戸初期から中期）についてはすで

に表2にて示しているため、本節では江戸時代中期から後期に蒐集されたとされる「日本古城絵図」を用いる。今回比較対象とする7地区については、この「日本古城絵図」のなかに全て城絵図が所収されている。

また、景観的な比較を行うために、近世城下町の復元画家として一定の評価を受けている荻原一青²²⁾が描いた「日本名城画集成」²³⁾を用い、比較検討のためのデータとする。桑名と宮津の2地区以外は荻原が描いた絵が確認できるものの、桑名と宮津は確認できなかったため、それぞれ個別に現在残されている城絵図を別途調査し、表に掲載することとする。

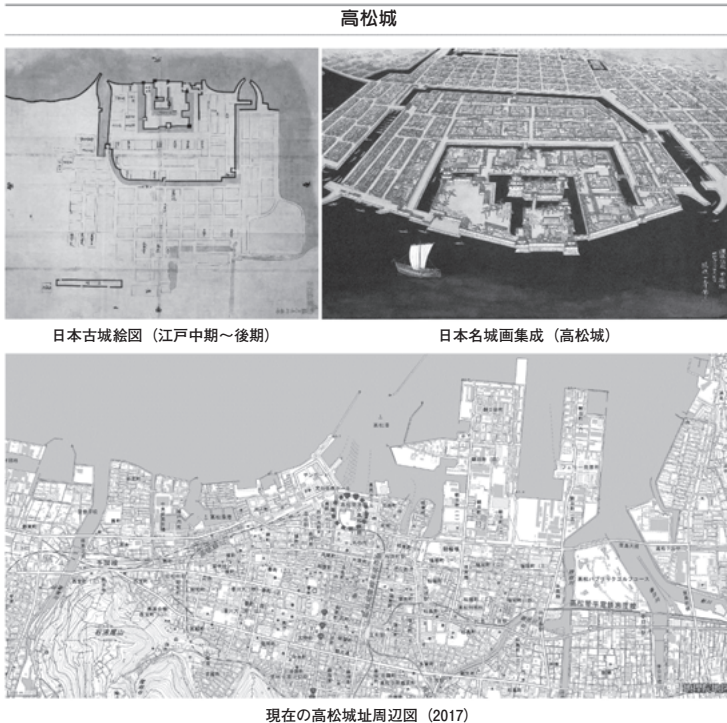
続いて、現代の城郭周辺の様子を把握するべく、国土地理院が公開している地形図を用いて、7地区すべて同じ縮尺で比較していく。なお、各地形図上には城址位置に (点線の丸印)をつけることとする。その他、表中ではa. 歴史的概要、b. 構図の特徴、c. 現在の状況という3つの共通する項目でそれぞれの海城町を把握・記載していく。

以上、これらの結果は次の表にて示していく(表4参照)。

22) 荻原一青(1908-1975)は城郭復元画の第一人者とされる。尼崎出身で、尼崎城址周辺の石垣や堀が開発によって失われることを契機として城郭復元画に着手し始める。尼崎城をはじめ、私財を投じて全国の城郭復元画を描き、残された作品の多くは熱海城の日本城郭資料館にて展示・保管されている。

23) 荻原一青(1978)「日本名城画集成」小学館

表4 同心円型平城にみられる構図的特徴と空間変容の比較



a. 歴史的概要

豊臣秀吉による四国制圧後、生駒親正が讃岐国領主となり、讃岐を治める地として香東川河口が選地され、1588年に築城が開始、1590年に高松城が完成したとされる。縄張の設計は黒田如水が手掛けたとされ、別名玉藻城とも呼ばれる。1639年、生駒騒動により生駒家は改易となり、1642年に松平頼重が12万石で入封する。頼重は全国に先駆けて城下に上水道を整備するなど、城下町の基盤は江戸初期に形成される。以後、幕末まで松平氏の居城となる。

b. 構図的特徴

城郭を中心として扇状に城下町が形成されており、「海-城-町」の配置が線対称となる端正な構図的特徴を有している。1637年、高松城下に流れ込んでいた香東川本流を付け替えたことにより、高松城地先の土砂堆積は抑制され、「海-城-町」の配置関係が長期的に保たれることとなった。

c. 現在の状況

高松城の天守は明治になって破却されるも、城郭は内堀部分が玉藻公園として保全活用されている。城郭地先は港湾整備のため1928年に護岸整備されるものの、城郭から海までの距離は60m程度であり、現在においても海と城郭は至近距離に存在している。また、高松駅と高松港も城周辺に整備され、駅・港・城が近接して立地する全国的にも珍しい配置となっている。

表4 同心円型平城にみられる構図の特徴と空間変容の比較(つづき)

桑名城



日本古城絵図(江戸中期～後期)



正保城絵図(江戸初期)



現在の桑名城址周辺図(2017)

a. 歴史的概要

1601年、関ヶ原の戦い後、徳川家康は本多忠勝を桑名に入封し、揖斐川沿いに城郭および城下町の建設を始める。揖斐川の支流を利用して掘割をつくり、城内には船着場をつくるなど、本格的な水城が整備された。また、桑名は東海道の七里の渡しがあり、交通の要衝であった。1617年、本多家は姫路に移封となり、松平家が入封となる。1701年に桑名市街地で大火があり、天守が焼失するも以後現在まで再建されていない。

b. 構図の特徴

揖斐川の河口沿いに城郭が建設され、城下町にも掘割が大胆に整備されている。城郭を中心として同心円に近い城下町の配置となっている。城郭部分の掘割は、揖斐川の岸辺を底辺として直角三角形の形状となっており、町割は掘割に準拠して計画されている。東海道の要衝であり、舟運が盛んであった。

c. 現在の状況

揖斐川河口の土砂堆積と埋め立てによる市街化が進み、城郭は揖斐川の堤防を挟んで川に面するも、河口までは4.5km程度離れている。城下町に整備された多くの掘割は埋め立てられ、城郭周辺の一部にその記憶を留めている。中津城と同様、築城当時に比べれば海との関係性は弱まっており、現在は河城との境界にあるといえる。

表4 同心円型平城にみられる構図的特徴と空間変容の比較(つづき)

宮津城



日本古城絵図(江戸中期～後期)



丹後宮津城之圖(時期不明・筑波大学所蔵)



現在の宮津城址周辺図(2017)

a. 歴史的概要

宮津の地に城が築かれたのは、1580年、織田信長の命を受けて丹後を攻略した細川藤孝が築城を始める。関ヶ原の戦い後、徳川家康から京極高知が丹後国12万3千石を拝領し、丹後の中心地を舞鶴から宮津へと移すこととした。その後、2代藩主高広の代で宮津城を大規模に改修し、近世城郭と城下町を整備した。しかし、1666年に宮津藩京極家は改易となり、その後城主がめまぐるしく変わるも1758年に松平資昌が7万7千石で入封し、明治維新を迎える。

b. 構図的特徴

リアス式海岸である若狭湾の最西端に位置する宮津湾の湾奥に城郭および城下町が位置している。同じ湾内には美しい砂州として著名な天橋立が位置しており、日本海側にあつて極めて静穏な海域に築城された。城郭を中心として同心円状に城下町が形成されるも、城郭はやや東寄りに位置している。宮津市街地の中心部を流れる大手川を利用して掘割が整備されている。

c. 現在の状況

明治以降、宮津城内の建造物は大部分が破却され、城郭周辺は市街化や埋め立てが進み、現在は太鼓門と一部の石垣のみにその遺構を見ることが出来る。宮津城地先はほとんど埋め立てがなされていないものの、城郭の遺構がほぼ残されていないため、現状では海城としての特徴を確認することができない。

表4 同心円型平城にみられる構図の特徴と空間変容の比較(つづき)

三原城



日本古城絵図(江戸中期～後期)



日本名城画集成(三原城)



現在の三原城址周辺図(2017)

a. 歴史的概要

小早川隆景は自身が築造した水軍の拠点である三原要害を原型として、1580年から10年かけて近世城郭としての整備を行った。関ヶ原の戦い後、1600年に福島正則が安芸・備後に入封となり、三原城には養子の正之が入封した。1619年、福島氏は改易となり、安芸国には和歌山藩筆頭家老の浅野忠長が入封し、三原城は広島藩の支城として幕末まで利用される。

b. 構図の特徴

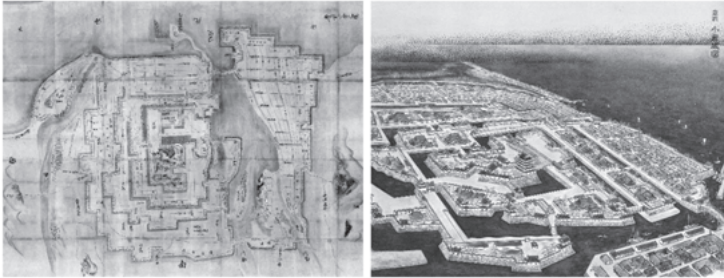
沼田川と和久原川の河口にあり、三原湾に浮かぶ小島を利用して縄張が整備された。城郭を中心として同心円状に城下町が形成され、満潮時には海に浮かんだように見えるところから浮城とも呼ばれている。軍港として整備されたことから、海に臨する城郭部分はその他の海城と比較して複雑に設計されている。3万石という規模からすれば、城郭部分は過大なつくりとなっている。

c. 現在の状況

明治維新以降、天守や櫓は破却され、1894年には山陽鉄道の駅舎が本丸跡地の天守台に建設され、現在も三原駅として利用されている。三原湾にそそぐ河川の堆積作用と市街化による埋め立てにより、現在は城郭から河口まで1.5km程度離れており、城郭が内陸化するとともに掘割のほとんどは埋め立てられ、天守台と内堀にのみその記憶を留めている。

表4 同心円型平城にみられる構図的特徴と空間変容の比較(つづき)

小倉城



日本古城絵図(江戸中期～後期)

日本名城画集成(小倉城)



現在の小倉城址周辺図(2017)

a. 歴史的概要

1600年関ヶ原の戦いで功績をあげた細川忠興が丹後国宮津城から豊前国に入封、当初は中津城に居城するが、1602年、毛利氏の居城であった小倉城を7年かけて近世城郭として改築し居城した。紫川を城地の中心に据え、西側を城郭および武家地とし、東側を主に町人地として城下町を整備した。1632年、細川家が肥後国に移封となり、播磨国明石から小笠原忠真が15万石で入封し、以後幕末まで小笠原氏の居城となる。

b. 構図的特徴

関門海峡に面するこの地は古くから陸海の交通の要衝であり、紫川の河口に城郭および城下町が建設された。城郭を中心にして同心円状に城下町を整備し、城郭だけでなく城下町の外郭にも掘割が築かれている。城内には紫川が大きく貫入し、城郭は紫川の西岸に築城された。城郭および城下町には幾重にも掘割が整備され、堀の形状も単純ではなく、入隅と出隅を数多くつくる形状となっている。

c. 現在の状況

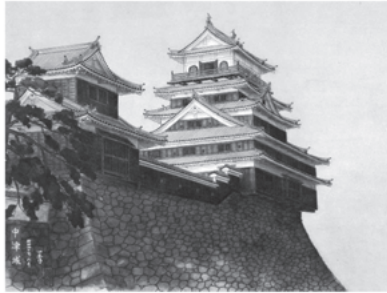
江戸の頃は直接海に面する形で城郭および城下町が整備されるものの、現在は市街化と埋め立てが進行し、城郭から河口まで2km程度離れており、海城と河城の境界域にあるといえよう。1837年、天守が焼失するも再建されず、戦後、1959年に鉄筋コンクリート造の天守を外観復興した。

表4 同心円型平城にみられる構図の特徴と空間変容の比較 (つづき)

中津城



日本古城絵図 (江戸中期～後期)



日本名城画集成 (中津城)



現在の中津城址周辺図 (2017)

a. 歴史的概要

豊臣秀吉より豊前国を与えられた黒田如水は、1588年中津川河口に中津城の築城を開始する。1600年に黒田家は筑前に転封となり、細川忠興が豊前国と豊後国に入封、中津城の修築を手掛ける。その後、縄張は扇形に拡張され、1621年に完成となる。その後、細川家から小笠原家が入封し、単独で中津藩が成立する。1717年、奥平昌成が10万石で中津城入封となり、明治維新まで奥平家の居城となる。

b. 構図の特徴

中津川の河口に位置し、城郭を中心として同心円状に城下町が形成されている。城郭の掘割は、川岸を底辺として直角二等辺三角形の形状をとり、城下の町割は堀の形状に沿った矩形の町割となっている。日本古城絵図から、江戸後期には中津川の土砂堆積が進んでいる様子がわかる。

c. 現在の状況

明治維新以降、中津城は天守も含めて多くの建造物が破却される。戦後、1964年に模擬天守が建造され、現在は民間企業に売却されている。明治以降も中津川の土砂堆積は進み、城郭前には中津川を挟んで中州が大きく発達している。築城当時、城郭は海と近接する河口付近に立地するものの、現在は市街化と埋め立てが進行し、城郭から河口まで1.5km程度離れることとなった。海との関係性は築城当時に比べれば弱まっており、海城と河城の境界域にあるといえる。

表4 同心円型平城にみられる構図的特徴と空間変容の比較(つづき)



a. 歴史的概要

1597年、豊臣秀吉は臼杵より福原直高を12万石でこの地に転封し、大分川河口に築城を開始した。1601年、徳川家康は竹中重利を3万5千石で入封し、府内城および城下町の改修を始める。1607年には城郭がほぼ完成となる。その後、竹中氏、日根野氏と城主が変わるも、1658年に大給松平氏が入封となり、以後明治維新まで居城する。1743年の大火により、天守を含む多くの建造物が焼失し、現在まで天守は再建されていない。

b. 構図的特徴

大分市中心部は中世のころに府内と呼ばれ、もともと船の荷役を行っていた場所に築城されたことから荷揚城とも呼称される。当初は12万石の近世城郭として築城が始まり、大分川河口に面する城郭部分を底辺として、掘割が直角二等辺三角形の形状で縄張が設計され、町割は堀の形状に沿ってなされている。こうした縄張は中津城、桑名城でも確認できる特徴である。

c. 現在の状況

築城当時から府内城地先には芦原が広がり、海に面するとはいへ、大分川の土砂堆積は進行していた。明治以降、県庁所在地となったことから大規模な市街化と埋め立てが進み、現在は城郭から河口まで2.5km程度離れている。城郭内堀の遺構は残るものの、市街化によって内陸部の立地となっている。

4-2. 比較考察

前項にて、高松と近い構図の特徴をもつ同心円型平城7地区のデータを収集し、表形式でその結果を示した。本項では、それぞれ7地区の海城町を比較したうえで、構図の特徴や現状に関して比較考察し、海城町・高松の特異性について把握していく。

まず、構図の特徴の比較結果であるが、7地区のうち桑名、中津、府内の3地区については、水域に面する城郭を底辺とする直角三角形の形状で城郭の掘割が設計されており、縄張の設計に共通性が確認できる。また、高松、宮津の2地区は、水域に面する城郭を一辺とする矩形の形状で縄張が設計されている。小倉と三原については、今回比較した海城のなかではそれぞれに独自性が強く、小倉は河川を城内に大胆に流入させた総郭の縄張とし、三原は港としての機能性を重視した縄張となっている。

続いて、現状の城址付近に関する比較結果となるが、まず、江戸時代に築城された現存木造天守が残る地区は同心円型平城にはなく、ほぼ全ての地区で天守は破却もしくは焼失し、戦後、2地区（中津、小倉）で鉄筋コンクリート造の模擬天守が築造されている。また、現在の都市規模でみれば、7地区のうち2地区（高松城が位置する高松市、府内城が位置する大分市）が県庁所在地となっており、2017年時点での人口規模でみれば、高松市は42万人程度、大分市は48万人程度となっている。その他、人口規模順に示せば、北九州市96万人²⁴⁾、桑名市14万人、三原市9.5万人、中津市8.5万人、宮津市2万人程度となっており、高松、府内、小倉の3地区は明治以降も人口集積が進む地域の中核的な都市として発展してきた。続いて、7地区のうち、現在においても城址付近に水域が存在している地区は4地区（高松、中津、桑名、宮津）確認できる。そのうち、中津と桑名の2地区については河川による土砂堆積や市街化による埋め立て等により、海域となる河口からは遠ざかる結果となっている。また、宮津については、城址周辺の海岸線は江戸時代からほぼ変わらないもの

24) 小倉城が位置する北九州市は、1963年に小倉市・門司市・戸畑市などを合併して政令指定都市の指定を受ける。旧小倉市は現在の小倉北区と小倉南区に相当し、2017年の人口は39万人程度である。

の、城郭の石垣や建造物はその大部分が失われており、海城としての遺構はほとんど確認できない状況となっている。結果として、唯一、高松城址地先には護岸を挟んで海域が広がっており、内堀も含めた石垣や一部の櫓に当時の記憶が残されている。

最後に、本章で把握できる海城町・高松の特異性についてまとめる。まず、高松は城郭を中心として同心円状に城下町が広がる「同心円型」でかつ「平城」であり、こうした構図をとる海城町は全国に7地区存在することがわかった。なかでも、高松は海に対して城郭が正対し、「海－城－町」という軸を中心に東西にほぼ線対称となるような城郭および城下町の配置構造となっており、こうした構図的特徴をもつ海城町は全国でも唯一であることが把握できた。

5章 ま と め

本研究では、近世高松における都市構造上の特異性を明らかにすることに主眼をおいて、全国の近世城下町を対象に海との関係性に着目した城郭および城下町の構図的特徴を類型化し、代表的海城町についてより詳しく比較考察をしたものである。本章では、結論として本研究で明らかになったことを整理し、海城町の構図的特徴についてまとめるとともに、高松における都市構造上の特異性について考察を深めていく。

5-1. 本研究で明らかになった点

本節では、本研究の目的に照らし合わせ、本研究で明らかとなった知見を整理するが、近世城下町の構図的特徴を明らかにするうえで、本研究では現在把握できうる種々の城絵図を広範に蒐集し、同時代における城下町の配置を比較考察することができる主要な史料をあらためて把握できた点に、方法論上の成果があったといえる。具体的にいえば、一国一城令後、江戸初期における全国の城絵図を描写・蒐集した「浅野文庫蔵諸国当城之図」や江戸中期から後期にかけて編集された国立国会図書館所蔵の「日本古城絵図」、こうした基礎的な史料的研究成果が既往知見として整理されていたことで、本研究を進めること

ができた。以下に、近世城下町における「海城」の特定、「海城町」の構図比較、高松における都市構造上の特異性、という3つの観点から本研究で明らかとした知見を整理する。

近世城下町における「海城」の特定

- ・織豊期以降に築城された全国の近世城下町を対象として、城郭が直接海に面する「海城」を抽出したところ、全国で24地区の「海城」を特定することができた(表1, 図2参照)。
- ・特定された「海城」は桑名城、鳥羽城を東端とする西日本側に全て立地することが把握できた。
- ・「海城」が面する海域は全て内湾もしくは内海となっており、外洋に直接面する「海城」は近世城下町において確認できなかった。また、24地区の「海城」のうち、半数以上となる13地区が瀬戸内海に面していることがわかった。

「海城町」の構図比較

- ・「海城」の城郭および城下町を含めた「海城町」の構図比較を行い、海との関係性に着目した城郭および城下町の付置関係を分析した結果、「出島型」「同心円型」「並置型」という3つの構図類型に分類することができた(表2, 3参照)。
- ・「海城町」における3つの構図類型の特徴として、「出島型」に該当する9地区のうち赤穂を除く8地区が平山城の城郭構造をとることがわかった。また、「同心円型」に該当する9地区のうち、宇和島と日出を除く7地区が平城の城郭構造をとり、同じく9地区のうち桑名と宮津を除く7地区が瀬戸内海沿いに築城されていることが把握できた。続いて、「並置型」に該当する6地区のうち、米子と洲本を除く4地区が平城の城郭構造をとることがわかった。

高松における都市構造上の特異性

- ・全国の近世城下町のなかで、高松と同様の構図的特徴（同心円型かつ平城）をもつ「海城町」は7地区存在することが把握できた（表4参照）。
- ・7地区のうち、桑名、中津、府内の3地区については、水域に面する城郭を底辺とする直角三角形の形状で城郭の掘割が設計されており、高松、宮津の2地区は、水域に面する城郭を一辺とする矩形の形状で掘割と町割がなされていることがわかった。小倉、三原の2地区はそれぞれ独自の縄張や町割がなされている。
- ・高松の構図的特徴にみられる特異性として、城郭が海に対して正対し、「海-城-町」という軸を中心として東西にほぼ線対称となるような城郭および城下町の配置構造となっている。構図的特徴と町割が近い宮津の場合、城下町を縦貫する大手川が市街地を分断し、大手川右岸に築城された城郭は全体構図の中心からやや東に位置しているため、高松にみられる均整のとれた構図とは言い難い構図となっている。こうした構図上の検討から、城郭が海に対して正対し、「海-城-町」という軸を中心として東西にほぼ線対称となる海城町・高松の構図的特徴は全国でも唯一であることが把握できた。
- ・7地区のうち、現在においても城郭周辺に水域が残る地区は高松、中津、桑名、宮津の4地区であり、そのうち、中津と桑名の2地区については、江戸時代に面していた河口周辺の土砂堆積が進み、現在は河口と城郭が離れることとなり、海城と河城の境界域にあるといえる。宮津は城郭地先の海域は残るものの、城郭の一部の石垣と門が大手川に残るのみで、城郭の記憶はほとんど失われている状況にある。現在においても城郭間近に海域が残り、かつ城郭の遺構がある程度残されている地区は高松のみであることが把握できた。

以上が本研究で明らかとした知見となる。

5-2. 近世高松における都市構造上の特異性に関する考察

本研究では、近世城下町の城絵図等を用いて「海城」を特定し、城下町を含む「海城町」における海との関係性に着目した構図上の類型化を行うことで、それぞれの構図の特徴を把握した。そのうえで、海城町・高松における構図の特徴をより詳細に比較考察し、その特異性を明らかとした。最後に、本節では本研究を通じて明らかとなった知見からいくつかの考察を試みたい。

まず、本研究で全国近世城下町の城絵図を蒐集し、主要な城絵図集をもとに海と城郭が直接面する「海城」を24地区特定した点については、本研究の重要な研究成果であると考えている。また、特定した24地区の「海城」が、三重県以西の西日本側に位置しており、東日本では「海城」が発見できなかったという点についても、1つの研究成果として学術的意義があると考えている。なぜ「海城」は東日本には存在せず、西日本に24地区全ての「海城」が築城されることとなったのか。いくつかの視点で考察は可能であるが、1つは地形的制約と歴史的経緯の観点から考察できる。東日本と西日本を地形の観点から比較した場合、大きく異なるのは（北海道を除いて）東日本は1つの陸地で構成されるが、西日本は瀬戸内海を媒介として、本州、四国、九州という3つの陸地で構成されている。また、瀬戸内海は古代から重要な交通路として、近畿と九州、さらには中国大陸との交流が存在した。こうした地形的制約や交通上の利便性が西日本に「海城」を築城する必然性を生み出し、東日本に「海城」を築城する必然性を生み出さなかったと考察できる。

続いて、城下町を含む「海城町」の構図比較を通じて明らかとなった諸点とともに、近世高松に確認できる都市構造上の特異性について考察する。日本における近世城郭史上、あるいは近世都市史上、なぜ高松にのみ均整のとれた海城町の配置が可能となったのか、すなわち、城郭を要として扇形に城下町が形成され、「海-城-町」という軸を中心にほぼ線対称で構成される構図がなぜ高松のみとなりえたのか。本研究で主としたテーマであり、本研究を通じて高松の特異性を明らかとしたが、こうした特異性がなぜ高松で発現しえたのか、本研究でも考察を試みたい。まず、1つの重要な視点は、高松が位置している周辺も含めた地形条件であろう。高松城を海城として築城する際、目の前が瀬

戸内海であることは必須ともいえる海象条件であったと考えられる。しかし、城郭地先の海域が内湾や内海など静穏な海象条件であることは、その他全ての「海城」で共通する必要条件であり、高松の特異性は説明できない。続いて考えられうるのが、築城地に流入している川の存在である。景観上も構図上も高松と近い配置関係にある同心円型平城7地区で検討すれば、築城地にある川の流路が「海城町」の構図の特徴に大きな影響を与えていると考えられる。まず、前項でも知見として整理した通り、7地区のうち桑名、中津、府内の3地区は掘割の形状が直角三角形で構成されているが、これは3地区ともに一級河川（桑名は揖斐川、中津は中津川、府内は大分川）が築城地に存在したことと関係しており、3地区それぞれに河口付近に築城するが、掘割の形状を直角三角形とした理由として、大きな河川の流れ（力）を止めず、むしろ水流を利用して城内に流し入れるとともに、河口付近で潮の干満があることから、上流下流どちらからも水流が入りやすい形状を検討し、かつ建設および町割の効率性も鑑みて直角三角形となったのではと本研究では考察している。また、その他、小倉と宮津の2地区はそれぞれ、小倉は紫川、宮津は大手川が城下町中心に貫入しており、その結果、城郭は川を挟んでどちらかの岸に位置することとなり、城郭を中心とする配置はとりづらく、実際に小倉は西寄り、宮津は東寄りに城郭が立地することとなった。残りは高松と三原の2地区であるが、三原は沼田川と和久原川が流入する三原湾の小島を利用して築城が手掛けられており、背後に山が迫るほとんど平野がない場所に、水軍の港を主目的として築城がなされていった。ゆえに、三原城下町に大きな川は流入していないものの、城下町が広がる平野がほとんどなく、広島城の支城という位置づけからも、高松に見られるような大規模な「海城町」とはなり得なかった。このように川の存在をもとに城郭および城下町の立地や形成を検討していけば、高松の都市構造上の特異性を生み出した1つの要因として川の存在を挙げることは可能であろう。では、なぜ平野が多い三角州に築城された高松城下町に川が流入しなかったのか、これはもともと築城前に高松の地に流れていた香東川の流路と江戸時代初期に実施した香東川付け替えが大きな理由となりうる。まず、香東川の流路であるが、築城当時、もともとの地形条件から城郭部分と城下町の中心

部が周辺より微高地に形成されており、香東川は城下町を回りこむように本流は城下町の西側を流れ、支流は城下町の東側を流れていたとされている。結果として、川が城下町中心に貫入することなく、「海－城－町」という中心軸が存在する均整のとれた構図をとることが可能となった。そして、もう1つ重要な要因が、1637年に実施した西嶋八兵衛による香東川の付け替えである。もともと高松は雨量の少ない土地柄もあり、日本のその他の地域に比べれば河水の流量が少ない特徴をもつが、築城当時はたびたび香東川による浸水被害があったことから、西嶋八兵衛によって香東川本流が峯山の西側に付け替えられ、結果的に高松城下町への大きな河川の流入はなくなり、高松城地先の土砂堆積も抑えられることとなったと考えられる。

以上、海城町・高松の特異な構図を生み出した要因について考察を試みた。本研究では、主に地形的条件からその考察を試みたが、他にも、たとえば高松城の縄張を設計したとされる黒田如水や、「海城」の築城を得意とした藤堂高虎や細川忠興という築城家に対する分析や考察も必要とされよう。また、近世城下町から特定した24地区の「海城」について、その発生やそれぞれの関係性など、研究や考察を深めていく余地は多く残されている。とはいえ、本研究で主題とした海城町・高松がもっている都市構造上の特異性については、本研究を通じて一定程度明らかにできたと考えている。

最後に、こうした近世からの都市構造上の特徴をもつ高松の今後のまちづくりについて稿を進める。4章でも比較分析したように、高松と近い構図の特徴をもつ海城町のなかで、唯一、高松のみが城址間近に海域が残り、その他の海城町は河川による土砂堆積や市街化の進展により、城址と海域が離れる現状となっている。海城らしさを感じるうえで、海と城郭の立地関係は極めて重要であり、高松城址北側の護岸を挟んで至近距離に瀬戸内海が面している現在の高松の状況は、海城としての景観的特徴を十分活用できる潜在性を有している。また、本研究を通じて明らかとしてきたように、高松は海城だけでなく、「海－城－町」という都市構造が構図的に均整のとれた配置となっており、こうした都市構造上の特異性を生かすためには、海と町をつなぐ城址および城址周辺の公共空間や都市機能の再編が極めて重要な役割を持つてくる。ちなみ

に、佐藤は高松の都市的変遷を分析したうえで、「藩政期以来、海と陸を貫く南北の軸が存在し、その接点に城郭があったのである。明治以降は高松駅と港が位置し、本四連絡船が海への方向をさらに強めていた。連絡船の廃止は実質的な海との結合を絶ってしまった。城下町から継承された南北の軸線は、海への方向性を失ったいま、何をつなぎ、どんなイメージを表現するのであろうか。」²⁵⁾と述べている。高松城址周辺は海域だけでなく、駅や港とも近接し、南には丸亀町商店街等の中心市街地を控えており、こうした個別の都市機能を空間的につないでいく潜在的な役割を持ち得ている。現状では、駅や港とまちなかの商店街はそれぞれ個別の施設となっており、空間的にも有機的なつながりを生み出す都市環境とはなり得ていない。こうした都市構造上の課題を解決するうえで、高松城址および城址周辺の公共空間が果たすべき役割は極めて大きいといえる。海城町・高松において、「海－城－町」という構造上の特異性や構図的魅力を活用していくためにも、本研究がその基礎的な知見の一助となれば幸いである。

25) 佐藤滋 (1995)「城下町の近代都市づくり」鹿島出版会, P. 122